

高校生・大学生の友人関係における自己切替と信頼感：「親友」観との関連で

著者名(日)	齊藤 英里香, 野中 弘敏
雑誌名	山梨学院短期大学研究紀要
巻	31
ページ	47-59
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000088/

高校生・大学生の友人関係における自己切替と信頼感

—「親友」観との関連で—

Situational Changeovers and Sense of Trust in High School and University Students' Relations with Friends: In Connection with View of "Close Friends"

斎藤 英里香*, 野中 弘敏

Erika SAITOH and Hirotoishi NONAKA

概要

本研究は、現代青年の友人関係の様相について考察するため、質問紙調査を通じて高校生・大学生の友人関係にまつわる状況に応じた切替と信頼感の様相を明らかにし、「親友」と「友人」の捉え方や関わり方の差異について検討した。その結果、状況に応じた切替と信頼感の関連では、自他への不信と自己表明を控える傾向、自他への信頼と積極的な内面の表明、相手の求める言動による関係維持傾向と表面的会話、友人の基準を相性におく傾向と相互の内面を理解しなくなる傾向との間に関連がみられた。「親友」観と「友人」観の関連では、親密な友人関係ほど相互理解の望みが強まり会話が内面的内容になる傾向、内面的な相互理解と信頼感の高まりや自己開示との関連、適度な距離の維持による親密でない友人との関係悪化回避傾向が明らかとなった。「親友」が定義されない例や友人に差はないとする例から、現代青年の友人関係意識の希薄さや未成熟の可能性が指摘された。

I. 研究の目的

エリクソン (Erikson, E. H.) によれば、青年期とは自分に対するアイデンティティ感情を自分のものとし、その感情がぼやけて曖昧になることを克服する時期とされ、アイデンティティは『社会的現実』に密接な関係をもっているとされる (谷, 2006)。このような青年期の課題と密接に関連する友人関係について、これまで様々な研究がなされている。例えば種村・佐藤 (2007) によれば、学校段階が上がるにつれ友人を厳選する傾向と親友観の変化とが相まって、報告される親友数は減少していき、他者からどう思われているのが気になり、自分が自分の親友からも親友と思われているかどうかの不安が生じるために親友が

いるか確信が持てなくなる傾向が現れるとされる。その一方で、学生において2～3人の親友がいるという者の割合が減り、4人以上の親友がいるという者の割合が増えるという指摘もある (富田, 1996)。これらは友人関係の「深さ」や「広さ」に着目した研究であるが、青年期の友人関係にはこれら2つの次元とは独立して、状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替える付き合い方の次元が存在するという指摘もある (大谷, 2007)。

これらの研究は友人関係の諸側面について検討されているものであるが、友人関係の質的な違いを呼び分けていると考えられる「親友」と「友人」との間で、その捉え方や関わり方の具体的な違いは明らかになっていない。また、状況に応じ

* 山梨県中巨摩郡昭和町立押原小学校

た切替と心理的ストレス反応との関連性は検討されているが(大谷, 2007), 心理的ストレス以外の心理的要因との関連性についても検討する必要があると考える。

そこで本研究では, 友人関係にまつわる状況に応じた切替と信頼感のあり方を明らかにするとともに, 青年期における「親友」と「友人」の捉え方や関わり方の違いを検討することを通じて, 現代青年の友人関係の様相について考察する。

Ⅱ. 研究・調査方法

【調査対象】 山梨県内の県立高校3校, 私立短期大学1校, 私立大学1校, 東京都内私立大学2校の合計7校に在籍している学生を対象に質問紙を配布, 回答を求めた。

【調査期間】 2009年7月

【調査内容】 学生を対象とした「友人関係」に関する選択式・自由記述式のアンケートを作成した。

【調査項目】

(1) 状況に応じた切替について(以下「切替尺度」)

大谷(2007)による友人関係の深さ・広さを測定するための友人関係新規尺度の一部を抜粋して, 状況に応じて自己や付き合う相手を切り替える傾向についての20項目からなる質問項目を作成し, 同性の友人(親友, それ以外の友人を含む)との普段の付き合い方について「7. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」までの7件法で回答を求めた。

(2) 信頼感について(以下「信頼感尺度」)

天貝(1995; 1997)による対人的信頼感を多次元的に測定するための信頼感尺度を実施した。対人関係における信頼感についての24項目について「6. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」までの6件法で回答を求めた。

(3) 「親友」・「その他の友人」との関係について(以下「親友・友人関係尺度」)

岡田(1995)による青年期の友人関係の特徴を測定する友人関係尺度と榎本(2003)による友人との活動の質問紙・友人に対する感情の質問紙の一部を抜粋して, 24項目からなる質問項目を作成

し, 「4. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」までの4件法で, 回答者の同性の「親友」と「その他の友人」のそれぞれについて回答を求めた。

(4) 「親友」と「その他の友人」の違いについての自由記述

「親友」と「その他の友人」の違いはどのようなものであると考えるか, 自由記述による回答を求めた。

【集計方法】

実施したアンケートは番号記入後, Microsoft Excel 2003にてデータ入力を行い, 統計分析にPASW Statistics 17.0を用いた。

【分析方法】

「切替尺度」「信頼感尺度」「親友・友人関係尺度」のそれぞれについて因子分析を行い, 因子数の特定と因子得点を算出した。自由記述の回答は分類を行い, その後の処理に用いた。(4)の自由記述は, 内容について複数の分類項目に該当すると考えられる場合には, 該当する全てに分類した。1人あたりの分類項目数は最大3となった。

Ⅲ. 結果と考察

高校1,435名(男723名, 女707名, 性別不明5名), 短期大学580名(男23名, 女555名, 性別不明2名), 大学427名(男329名, 女98名)の計2,442名から回答が得られた。

1. 切替尺度の因子分析

切替尺度の信頼性係数は, $\alpha=0.894$ と高かった。因子分析(主因子法/varimax回転)の結果, 初期の固有値が1.0を超える因子より3因子構造が妥当であると確認された(累積寄与率63.2%)。その後, 因子負荷量の絶対値が0.4に満たない項目, 0.4以上の負荷量が複数の因子にみられる項目を除いて因子分析を繰り返し, 表1の結果が得られた。

第1因子は友人に対して閉鎖的な関わりであるかどうかに関する特徴が考えられる。そこで, この因子を「閉鎖性」因子と命名した。第2因子は複数の自己を切り替えている特徴が考えられる大谷(2007)の結果と同様だったため, 先行研究にない「自己切替」因子とした。第3因子は自分

表1 切替尺度の因子構造 (主因子法/varimax 回転, 3 回目)

	因子		
	① 閉鎖性	② 自己 切替	③ 感情的 選択
4. 友人と本音で話すのは避けている。	.843	.221	
3. 友人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である。	.752	.213	.254
7. 友人にはありのままの自分は出せない。	.728	.342	
11. 傷つきたくないのに、友人には本当の姿は見せられない。	.716	.313	
1. 友人とは本音で話さないほうが無難だ。	.672	.204	
13. 友人には自分の考えていることを全部言う必要はない。	.546	.276	.367
15. 自分が自信をなくされるくらいなら、友人とかかわらないほうがいい。	.490	.229	.265
2. 恋愛相談する友人と、進路の相談をする友人は違うと思う。	.470		
5. その場の雰囲気によって、自分のキャラ (性格) が変わる。	.263	.757	
8. どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ (性格) が変わる。	.340	.744	
14. 「明るい活発な私」と「物静かで落ち着いた私」というような矛盾するタイプの目標を、場合により使い分けている。	.304	.508	.252
16. いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている。			.492
20. だれにでも好かれるのは無理だと思っている。			.487

表2 信頼感尺度の因子構造 (主因子法/varimax 回転, 4 回目)

	因子		
	<1> 不信	<2> 他人へ の信頼	<3> 自分へ の信頼
19. 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。	.742		
20. 私はなぜか人に対して疑い深くなってしまふ。	.723		
21. 今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。	.710	-.264	
16. 所詮、周りは敵ばかりだと感じる。	.701	-.256	
18. 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。	.664		
17. 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。	.629		
23. 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるからだ。	.622		
22. 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。	.615		
15. 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。	.571		
24. 私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。	.512		
9. これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	-.268	.720	
8. 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。	-.265	.668	
10. 状況が許せば、たいてい人間は互いに正直に、かつ誠実に関わりあいたいと思っているだろう。		.667	
11. 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。		.596	.277
7. これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた。		.585	.206
14. 無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。		.523	.392

13. 私は現実に信頼できる特定の他人がいる。		.517	.257
1. 私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。			.760
3. 私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う。			.746
2. 私は自分の人生に対し、何かとやっていけそうな気がする。			.703
4. 自分自身について、今は実現していないことでも、いつかはこうなるだろうと信じられることは多い。	.231		.641
5. 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている。	.201		.529
6. 私は私で、決して他人にはとってかわるものの出来ない存在であると思う。	.239		.486

表3 親友・友人関係尺度の因子構造（主因子法／varimax 回転，2回目）「親友」

	因子			
	〈Ⅰ〉 相互理 解活動	〈Ⅱ〉 心理的 距離	〈Ⅲ〉 不安・ 懸念	〈Ⅳ〉 独立
10. 将来についての話をする。	.772			
8. これからの生き方や人生観などについての話をする。	.765			
9. 互いの性格や行動についての話をする。	.722			
13. 喜びや悲しみを分かち合う。	.706			
11. お互いの欠点や長所の話をする。	.699			
7. 心を打ち明ける。	.675			
12. お互いの意見が違うときに納得するまで話し合う。	.630			.244
14. お互いの趣味についての話をする。	.607			
15. お互いに不満に思っている点を言い合う。	.577			.233
5. 真剣な議論をすることがある。	.546			
16. お互いの家で一緒に遊ぶ。	.460			
17. 特に用事もないのに電話で長く話をする。	.456			
2. 互いに傷つけないよう気をつかう。		.791		
1. 相手の考えていることに気をつかう。		.725		
6. 楽しい雰囲気になるよう気をつかう。		.580		
3. お互いのプライバシーには入らない。		.556		
4. 相手の言うことに口をはさまない。		.539		
19. 自分が友達・親友にどう思われているか気になる。		.241	.835	
18. 自分が本当に友達・親友と思われているか気になる。			.823	
20. 相手と意見が違うと不安になる。		.311	.500	
22. 相手と意見が対立しても自分をなくさないでいられる。	.352			.746
21. 相手と違う意見でも自分の意見はきちんと言う。	.436			.625
23. 相手と一緒にいても自分の意志で行動している。	.314			.569

との相性を考えながら友人選択をするという特徴が考えられることから、「感情的選択」因子とした。各因子の信頼性係数は「閉鎖性」 $\alpha=0.894$ 、「自己切替」 $\alpha=0.798$ 、「感情的選択」 $\alpha=0.496$ であった。

2. 信頼感尺度の因子分析

信頼感尺度の信頼性係数は、 $\alpha=0.764$ と高かった。因子分析（主因子法／varimax 回転）の結果、固有値を示すスクリープロットより3因子構造が妥当であると確認された（累積寄与率

表4 親友・友人関係尺度の因子構造（主因子法／varimax 回転，2回目）「その他の友人」

	因子			
	〈Ⅰ〉 相互理 解活動	〈Ⅱ〉 心理的 距離	〈Ⅲ〉 不安・ 懸念	〈Ⅳ〉 独立
10. 将来についての話をする。	.753			
8. これからの生き方や人生観などについての話をする。	.717			
9. 互いの性格や行動についての話をする。	.711			
13. 喜びや悲しみを分かち合う。	.701			
11. お互いの欠点や長所の話をする。	.670			
7. 心を打ち明ける。	.628			
12. お互いの意見が違うときに納得するまで話し合う。	.590			
14. お互いの趣味についての話をする。	.580			
15. お互いに不満に思っている点を言い合う。	.568			
5. 真剣な議論をすることがある。	.543			
16. お互いの家で一緒に遊ぶ。	.540			
17. 特に用事もないのに電話で長く話をする。	.529			
2. 互いに傷つけないよう気をつかう。		.767		
1. 相手の考えていることに気をつかう。		.701		
6. 楽しい雰囲気になるよう気をつかう。		.570		
3. お互いのプライバシーには入らない。		.538		
4. 相手の言うことに口をはさまない。		.527		
19. 自分が友達・親友にどう思われているか気になる。			.826	
18. 自分が本当に友達・親友と思われているか気になる。	.220		.796	
20. 相手と意見が違くと不安になる。		.217	.511	
22. 相手と意見が対立しても自分をなくさないでいられる。				.772
21. 相手と違う意見でも自分の意見はきちんと言う。	.354			.667
23. 相手と一緒にいても自分の意志で行動している。	.235			.652

52.8%)。その後、因子負荷量の絶対値が0.4に満たない項目を除いて因子分析を繰り返したところ、表2の結果が得られた。

第1因子から第3因子の項目が天貝（1995；1997）の結果と同様だったため、先行研究による因子名をそのまま採用した。すなわち、第1因子は自分を含めた人一般を疑うかどうかに関わるものであることから「不信」因子、第2因子は他人を信じることに関するものとして「他人への信頼」因子、第3因子は自分を信じることに関するものとして「自分への信頼」因子とした。各因子の信頼性係数は、「不信」 $\alpha=0.884$ 、「他人への信頼」 $\alpha=0.851$ 、「自分への信頼」 $\alpha=0.830$ といずれも高かった。

3. 親友・友人関係尺度の因子分析

親友・友人関係尺度の信頼性係数は、親友 $\alpha=0.852$ 、その他の友人 $\alpha=0.859$ と高かった。「親友」での親友・友人関係尺度の因子分析（主因子法／varimax 回転）の結果、固有値を示すスクリープロットより4因子構造が妥当であると確認された（累積寄与率56.0%）。その後、因子負荷量の絶対値が0.4に満たない項目を除いて因子分析を行ったところ、表3の結果が得られた。

また、「その他の友人」での親友・友人関係尺度の因子分析（主因子法／varimax 回転）の結果も、固有値を示すスクリープロットより4因子構造が妥当であると確認された（累積寄与率55.1%）。その後、「親友」の場合と同様に因子分

析を行ったところ、表4の結果が得られた。

「親友」と「その他の友人」でほぼ同様の因子構造がみられたため、共通する因子名を付けた。すなわち、第1因子は親友・友人との関わりが積極的であるかどうかという特徴から「相互理解活動」因子、第2因子は親友・友人との関わりで精神的な距離を保とうとすることに関するものとして「心理的距離」因子とした。第3因子、第4因子は榎本(2003)の結果と同様だったため、先行研究の因子名をそのまま採用した。第3因子は親友・友人との関わりに不安を感じていることについてのものとして「不安・懸念」、第4因子は親友・友人と自分を混同しないかどうかに関するものとして「独立」因子とした。

各因子の信頼性係数を求めたところ、「親友」では「相互理解活動」 $\alpha=0.893$ 、「心理的距離」 $\alpha=0.780$ 、「不安・懸念」 $\alpha=0.796$ 、「独立」 $\alpha=0.788$ であった。また「その他の友人」では「相互理解活動」 $\alpha=0.892$ 、「心理的距離」 $\alpha=0.758$ 、「不安・懸念」 $\alpha=0.791$ 、「独立」 $\alpha=0.784$ となり、いずれにおいても高い信頼性が示された。

4. 切替因子と信頼感因子の関連

切替尺度と信頼感尺度との間の関連について検討するため、各尺度の因子得点間の相関係数を調べたところ、表5の結果が得られた。

切替尺度の①「閉鎖性」において、信頼感尺度の〈1〉「不信」との間で有意な正の相関($p<0.01$)が得られたことから、人を疑ってしまう人は人間関係に警戒心を抱いているために、本音を話せないのではないかと考えられた。また、①「閉鎖性」と〈2〉「他人への信頼」、〈3〉「自分への信頼」との間で有意な負の相関($p<0.01$)が得られたことから、他人を信頼できない人は自分の全てをさらけだしても無駄だと感じ本音を話さないのではないかと考えられた。また、①「閉鎖性」と「相互理解活動」(〈I〉〈i〉)との間で有意な負の相関($p<0.01$)が得られたことから、本音を話せない人ほど会話は内面的内容ではなく表面的内容になりやすいことから、親友・友人を問わずお互いの内面を理解することが難しくなることが考えられる。さらに①「閉鎖性」と「友人」の〈iv〉「独立」との間で有意な負の相

切替尺度の②「自己切替」において信頼感尺度の〈1〉「不信」との間で有意な正の相関($p<0.01$)が得られたことから、人間関係に不信を抱く人は他人との深い関係を求めず、その場だけ他

表5 切替尺度の各因子得点と信頼感尺度の各因子得点の相関係数

	〈1〉 不信	〈2〉 他人への 信頼	〈3〉 自分への 信頼
①閉鎖性	.429**	-.365**	-.067**
②自己切替	.284**	-.016	-.039
③感情的選択	.267**	-.081**	.022

(*: $p<.05$ **: $p<.01$)

人に合わせた浅い関係を保とうとすることがうかがえた。

切替尺度の③「感情的選択」において、信頼感尺度の〈1〉「不信」との間で有意な正の相関($p<0.01$)が、〈2〉「他人への信頼」との間で有意な負の相関($p<0.01$)が得られたことから、人間関係に警戒心を抱き、他者を信頼できずにいる人は、友人にいつかは裏切られてしまうのではという不安から、友人と深く関わろうとせず浅い関係を保とうとするため、友人となる基準が相手とのきめ細やかな相互理解に基づく信頼感よりも、より感覚的で表層的なイメージである「相性」に重点を置いているのではないかと考えられた。

5. 切替因子と親友・友人関係因子の関連

切替尺度と親友・友人関係尺度の「親友」及び「その他の友人」(以下「友人」)との間の関連を検討するため、各尺度の因子得点間の相関係数を調べたところ、表6の結果が得られた。

切替尺度の①「閉鎖性」について、親友・友人関係尺度の「心理的距離」(〈II〉〈ii〉)、「不安・懸念」(〈III〉〈iii〉)との間で有意な正の相関($p<0.01$)が得られたことから、相手に気をつかい、どのように思われているのか気になる人ほど、自分を出したときの相手の反応を考えてしまうために、親友・友人を問わず本音を話すことができないのではないかと考えられる。また、①「閉鎖性」と「相互理解活動」(〈I〉〈i〉)との間で有意な負の相関($p<0.01$)が得られたことから、本音を話せない人ほど会話は内面的内容ではなく表面的内容になりやすいことから、親友・友人を問わずお互いの内面を理解することが難しくなることが考えられる。さらに①「閉鎖性」と「友人」の〈iv〉「独立」との間で有意な負の相

表6 切替各因子と親友・友人関係各因子の相関係数

	「親友」				「友人」			
	〈Ⅰ〉 相互理解 活動	〈Ⅱ〉 心理的 距離	〈Ⅲ〉 不安・ 懸念	〈Ⅳ〉 独立	〈i〉 相互理解 活動	〈ii〉 心理的 距離	〈iii〉 不安・ 懸念	〈iv〉 独立
①閉鎖性	-.283**	.195**	.059**	.004	-.254**	.099**	.064**	-.073**
②自己切替	.003	.064**	.072**	-.058**	-.120**	.158**	.126**	-.085**
③感情的選択	.021	.033	.008	.091**	-.217**	.140**	.018	.039

(* : p<.05 ** : p<.01)

関 (p<0.01) が得られたことから、特に親密ではない友人関係で自分を抑えようとする傾向は、確固とした自分もてず自信が揺らぎやすいという特徴の強さに関連することが推測された。

切替尺度の②「自己切替」について、親友・友人関係尺度の「心理的距離」(〈Ⅱ〉〈ii〉)、「不安・懸念」(〈Ⅲ〉〈iii〉)との間で有意な正の相関 (p<0.01) がみられたことから、相手に気をつかい、どのように思われているのか気になる人ほど、親友・友人を問わず自分を相手に合わせた言動をとることで、友人関係が壊れるのを避ける傾向があると考えられた。また②「自己切替」と「独立」(〈Ⅳ〉〈iv〉)との間で有意な負の相関 (p<0.01) が得られたことから、親友・友人を問わず自分の言動を相手によって変えようとする傾向は、自分の意志や考えに対する自信のなさから相手の求める自分になろうとすることを優先して、自分の意見を抑えやすくなることとの関連が考えられた。さらに、②「自己切替」と「友人」の〈i〉「相互理解活動」との間で有意な負の相関 (p<0.01) が得られたことから、さほど親密ではない友人の間では相手の求める言動をとることで関係を築く傾向が強いほど、相手が求めない限り自分を理解してもらおうとはしなくなること

が考えられた。

切替尺度の③「感情的選択」について、親友・友人関係尺度の〈Ⅳ〉「独立」との間で有意な正の相関 (p<0.01) が得られたことから、自分の意見は自分の意見として貫けるという関係ができていると捉える人ほど、親友とは「ウマが合う」と感じていると推測された。また③「感情的選択」と「友人」の〈ii〉「心理的距離」との間で有意な正の相関 (p<0.01) が得られたことから、親密な友人関係でないときには自分との相性を基準に友人関係を捉える傾向が強いほど、あまり相手の感情を害さないよう気をつかうことが考えられる。一方、③「感情的選択」と「友人」の〈i〉「相互理解活動」との間で有意な負の相関 (p<0.01) が得られたことから、さほど親密でない友人の間では友人とする基準を内面理解よりも「相性」に置くほど、互いの内面を理解しよう／してもらおうとはしなくなる可能性が考えられた。

6. 信頼感因子と親友・友人関係因子の関連

信頼感尺度と親友・友人関係尺度の「親友」及び「友人」との間の関連を検討するため、各尺度の因子得点間の相関係数を調べたところ、表7の

表7 信頼感各因子と親友・友人関係各因子の相関係数

	「親友」				「友人」			
	〈Ⅰ〉 相互理解 活動	〈Ⅱ〉 心理的 距離	〈Ⅲ〉 不安・ 懸念	〈Ⅳ〉 独立	〈i〉 相互理解 活動	〈ii〉 心理的 距離	〈iii〉 不安・ 懸念	〈iv〉 独立
〈1〉不信	-.017	.124**	.190**	.038	-.100**	.077**	.183**	-.062**
〈2〉他人への信頼	.331**	.031	.006	.012	.289**	.126**	.033	.075**
〈3〉自分への信頼	.175**	.054*	-.145**	.199**	.102**	.032	-.114**	.221**

(* : p<.05 ** : p<.01)

結果が得られた。

信頼関係尺度の〈1〉「不信」について、親友・友人関係尺度の「心理的距離」(〈Ⅱ〉〈ii〉)、「不安・懸念」(〈Ⅲ〉〈iii〉)との間で有意な正の相関 ($p < 0.01$) が得られたことから、他者に疑念をもちやすい人は、その警戒心が強いほど相手にどう思われているかもいっそう気になり、親友・友人を問わず相手に気を遣う傾向も強まることが示唆された。また、〈1〉「不信」と「友人」の〈i〉「相互理解活動」、〈iv〉「独立」との間で有意な負の相関 ($p < 0.01$) が得られたことから、特に親密ではない友人関係においては、警戒心が強ければ互いをより深く知ろうとはせず、自分が傷つかないう意思の表明を控えてしまいがちであることは想像に難くない。

信頼関係尺度の〈2〉「他人への信頼」について、親友・友人関係尺度の「相互理解活動」(〈Ⅰ〉〈i〉)との間で有意な正の相関 ($p < 0.01$) が得られ、他者を信頼している人は相手に自分のことも信頼してもらおうと、親友・友人を問わず自分の内面を開示するのではないかと考えられた。また、〈2〉「他人への信頼」と「友人」の〈ii〉「心理的距離」、〈iv〉「独立」との間で有意な正の相関 ($p < 0.01$) が得られたことから、特に親密でない友人関係では、他者への信頼感がある場合ほど、相手のプライバシーに立ち入らない程度の適度な距離を保ちつつ、相手に気づかうと同時に自分を語ることもできると考えられた。

信頼関係尺度の〈3〉「自分への信頼」について、親友・友人関係尺度の「相互理解活動」(〈Ⅰ〉〈i〉)、「独立」(〈Ⅳ〉〈iv〉)との間の有意な正の相関 ($p < 0.01$) から、自分を信頼している人は自分の意見に自信があるために、親友・友人を問わず他者と意見を交わし合いつつも自分の意見を揺らぐことなく伝えられるのではないかと考えられた。また、〈3〉「自分への信頼」と「不安・懸念」(〈Ⅲ〉〈iii〉)との間の有意な負の相関 ($p < 0.01$) は、自分を信頼している人は自分に自信をもって行動しているため、親友・友人を問わず相手にどう思われているのか気にならないことを示すと考えられる。さらに〈3〉「自分への信頼」と「親友」の〈Ⅱ〉「心理的距離」との有意な正の相関 ($p < 0.05$) から、親密な友人

との間でも自己の過信はかえって相手との意思疎通を困難にするという予見の上での配慮があるのではないかと推測された。

7. 「親友」と「友人」の違い

親友・友人関係尺度において、「親友」「友人」各4因子を代表する項目の標準得点の平均を「因子項目得点」とし、対応する因子項目得点間に差があるかを検討するため、t検定を行った。その結果、第1因子「相互理解活動」($t(2230) = 48.91$ ($p < 0.01$))及び第4因子「独立」($t(2334) = 29.02$ ($p < 0.01$))では「親友」の方が「友人」より有意に得点が高く、第2因子「心理的距離」($t(2329) = -28.54$ ($p < 0.01$))では「友人」が「親友」より有意に得点が高かった。

結果より、親密な友人関係になるほど互いを理解したい／してもらいたいと考える傾向が強くなるため、会話は表面的内容から内面的内容になりやすく、また相互理解への信頼のもとで自分の思いや考えを開示できることが考えられた。一方、さほど親密でない友人との間では、相手のプライバシーに無遠慮に立ち入らない適度な距離を保つことがむしろ、友人関係が壊れないための配慮と捉えられている可能性が推測された。

8. 切替因子の年代差と性差

切替尺度3因子と就学段階(高校及び大学)、性別との関係を見るために、切替の各因子項目得点について就学段階(2)×性別(2)の分散分析を行った。その結果、切替尺度の①「閉鎖性」では性別の主効果と交互作用が有意となり、男子が女子よりも高く ($F(1, 2309) = 41.17$ ($p < 0.01$))、いずれの就学段階でも男子が有意に高い得点を示していた ($F(1, 2309) = 7.55$ ($p < 0.01$))。また、③「感情的選択」では就学段階の主効果が有意であり、大学生が高校生よりも高かった ($F(1, 2309) = 7.54$ ($p < 0.01$))。

以上の結果から、男子はどの就学段階でも慎重に友人関係を築く傾向が強いほど、相手に自分を出そうとしなくなると考えられた。また、大学生になると高校時代よりも交友関係が広がり、より多様な他者と自分との比較を行う機会が増えることで、自分の特徴や指向がより明確化され、その

特徴や指向に合った友人との関係を求める傾向が強まるのではないかと推測された。

9. 信頼感因子の年代差と性差

信頼感尺度3因子と就学段階、性別との関係を見るために、信頼感各因子の因子項目得点について、就学段階(2)×性別(2)の分散分析を行った。その結果、信頼感尺度の〈2〉「他人への信頼」因子では就学段階、性別のいずれの主効果も有意で、大学生が高校生よりも高く($F(1, 2178) = 11.24(p < 0.01)$)、女子が男子よりも高かった($F(1, 2178) = 23.71(p < 0.01)$)。また、〈3〉「自分への信頼」因子でも就学段階、性別のいずれの主効果も有意で、大学生が高校生よりも高く($F(1, 2178) = 10.68(p < 0.01)$)、男子が女子よりも高かった($F(1, 2178) = 13.66(p < 0.01)$)。

以上の結果から、男子が相手の意志に合わせるよりも自分の意志を貫く傾向が強いほど自分の言動に自信をもつ一方で、女子は相手の意志を尊重してそれに合わせることへの志向の強さが他人との信頼関係の強さに関連しているのではないかと考えられた。また、大学生では今まで築いてきた友人関係を深めていこうとする傾向になるほど、自他の信頼感が強まることが示唆された。

10. 親友・友人関係因子の年代差と性差

親友・友人関係尺度の「親友」「友人」各尺度について、就学段階、性別との関係を見るために、各4因子の因子項目得点について、就学段階(2)×性別(2)の分散分析を行った。

その結果、「相互理解活動」因子(〈I〉〈i〉)では「親友」「友人」の双方で就学段階の主効果が有意となり、いずれも大学生が高校生よりも高かった(〈I〉 $F(1, 2217) = 31.20(p < 0.01)$; 〈i〉 $F(1, 2164) = 20.42(p < 0.01)$)。また、「親友」の〈I〉「相互理解活動」因子については性別の主効果も有意となり、女子が男子よりも高かった($F(1, 2217) = 170.29(p < 0.01)$)。

「心理的距離」因子(〈II〉〈ii〉)では、「親友」「友人」の双方で性別の主効果が有意となったが、「親友」の〈II〉「心理的距離」は男子が女子よりも高かった($F(1, 2217) = 46.41(p < 0.01)$)一方、「友人」の〈ii〉「心理的距離」は女子が男子

よりも高かった($F(1, 2164) = 68.35(p < 0.01)$)。また、「親友」の〈II〉「心理的距離」のみ就学段階の主効果も有意で、高校生が大学生よりも高かった($F(1, 2217) = 21.00(p < 0.01)$)。

「不安・懸念」因子(〈III〉〈iii〉)では、「親友」「友人」の双方で就学段階、性別のいずれの主効果も有意となり、いずれも高校生が大学生よりも高く(〈III〉 $F(1, 2217) = 5.89(p < 0.05)$; 〈iii〉 $F(1, 2164) = 12.13(p < 0.01)$)、女子が男子よりも高かった(〈III〉 $F(1, 2217) = 6.03(p < 0.05)$; 〈iii〉 $F(1, 2164) = 4.30(p < 0.05)$)。

「独立」因子(〈IV〉〈iv〉)では、「友人」のみで性別の主効果と交互作用が有意となり、男子が女子よりも高く($F(1, 2164) = 14.28(p < 0.01)$)、いずれの就学段階においても男子が有意に高い得点を示していた($F(1, 2164) = 4.00(p < 0.05)$)。

以上の結果から、女子は友人との関わりの中で相手にどのように思われているのか気になりながら、親密な関係の友人ほど互いの内面を理解し合い友人関係を深めていこうとする傾向が強いと考えられた。また、男子は親密な関係の友人、女子はさほど親密でない友人との関係が壊れるのを避ける傾向が強くなり、相手のプライバシーに立ち入らない程度の適度な距離を保とうとしている可能性や、男子ではさほど親密でない友人との関係ほど相手の意志に合わせるより自分の意向を貫こうとする可能性が考えられる。高校生では他者との信頼関係が比較的浅く、自分がどのように思われているのか気になり、相手にいっそう気を遣う傾向がある一方、大学生では信頼関係を深くしようとする傾向が強くなるため、互いの内面を理解し合う活動が増えてくるのではないかと考えられた。

11. 「親友」と「友人」の違いの類型化

「親友」と「その他の友人」の「違い」について記述された部分を抽出し、類型化を試みた。なお、一つの回答内に複数の質的に異なる「違い」についての記述がみられた場合は、それぞれを独立した1例として抽出した。

その結果、「親友」と「友人」の違いについて2,845例が抽出され、これらは「本心」「信頼」「共感」「居心地」「時間」「特になし」「特別」

「感覚」の8タイプに分けられた。各タイプに含まれるサブタイプ及び具体的回答例を表8に示す。

なお、「①本心」には親友とのコミュニケーションを、「②信頼」には親友との精神的距離を、「③共感」には親友との共通意識を、「④居心地」には親友との空間の雰囲気を、「⑤時間」には親友と過ごしている時間を、「⑦特別」には親友の存在について、「⑧感覚」には親友の関係を具象化困難とするものについて、主に採り上げている回

答を分類した。

「①本心」(45.4%)に分類された回答は「親友には本音を言える」「素の自分を出せる」「気をつかわない」等であり、親密でない友人とは関係を円滑にするために状況に応じた適切な対応を行っているのに対し、親密な友人には状況に左右されず自分の率直な気持ちで対応できているという性質を持つものと考えられた。

「②信頼」(14.5%)は「心からその人を信じている」「何があっても理解してくれる」等、親密

表8 「親友」と「その他の友人」の違いの分類例

	サブタイプ	N	回答例
① 本心	本音	778	親友は本音を言える。親友は何でも打ち明けられる人。
	素	212	親友は、自分の心を打ち明けられ素の自分を出せる。自分が自分でいられる人。
	気を遣わない	168	親友には気をつかわないで接することができる。一緒にいて気をつかわなかったり、色んな事が話せるかどうか。
	相談	93	悩みを素直に相談できること。親友は自分が困った時にすぐに相談できる人。
	心を開く	28	自分から心を開けるのが親友。心を許せる。
	話の内容	10	話す内容が違う。
	接し方	4	態度、しゃべり方。接し方。
	計	1,293	

② 信頼	信頼	206	親友は心からお互いが信頼しあっている友達。心からその人を信じているかどうか。
	理解	135	親友は、自分の良い所も悪い所も知っていて、全てを知っていてくれる人。親友は何も話さなくても理解しあえる。
	深さ	28	どこまで踏み込めるか。付き合いの深さ。
	支え	23	本当に苦しい時に支えてくれる人。お互いに心の支えになる。
	頼り	8	本当にピンチになった時、一番に頼る相手。
	成長	5	楽しく過ごすだけでなく、相手や自分を成長させるもの。お互いに影響し合って共に成長していく関係。
	尊敬	4	親友とは心から尊敬に値する人。
	目標	3	親友とは生きていく上での自分の目標。
	計	412	

③ 共感	相互理解	228	親友は互いが分かり合うことのできるもの。自分を理解していて、相手を理解できるかどうか。
	分かち合い	53	自分のことじゃなくて、相手のことでも、一緒に分かり合える。親友とは自分のことで同じくらい喜んだり悲しんだりしてくれる人。
	共有	14	苦しいことを一緒にやってきたかどうか。目標を共有している仲間。
	気が合う	9	気が合うか合わないか。
	助け合い	9	いざという時助けあえる。親友は両人が助け合い親身になれる。
	計	313	

④ 居心地	居心地	103	一緒にいてとても居心地が良い。親友は無言でも居られる。
	親密感	52	心理的距離の違い。親友はそこにいつでも私のそばにいていると思っている。
	気楽	47	話していて気楽でいられる存在。親友と一緒にいて楽な人。
	安心	41	一緒にいて安心感がある。
	落ち着く	35	心が落ち着く。親友は近くにいと心が落ち着く。
	気の持ち方	11	自分の気持ちの持ち方。心も持ち方だと思ふ。
	話しやすさ	4	話しやすい。
	計	293	

⑤ 時間	時間	127	一緒にいる時間が長い。親友はだいたい小さい頃からの付き合いなので気軽に何でも話せる。
	不変	87	親友というのはあまり連絡をとらなくても繋がっていらられる人。長い時間がたっても関係が切れない。
	連絡	15	何もなくても連絡をとったり遊んだりするかしないか。離れていても連絡をとって遊んだりする。
	計	229	

⑥特になし	166	特になし。違いはない。
-------	-----	-------------

⑦ 特別	家族	33	家族のようなもの。親友は家族同然のように仲良し。
	大切	32	大切な存在。親友は心から本当に大切だと思う人。
	特別	16	特別な存在。
	家に呼ぶ	9	お互いの家に気軽に遊びに行ける仲。
	心友	9	心の友。私にとって友人の上は心友です。
	命	6	いざという時に命をはるかばらないか。命をかけて守れる人と守れない人。
	全て	6	全て。
	計	111	

⑧ 感覚	感覚	18	何かが違うけど全然違う。ただなんとなく違う気がする。
	言葉で表せない	6	言葉で表せないもの。
	価値観	2	価値観の違い。
	性格	2	性格。
	計	28	

な友人とは内面的コミュニケーションや様々な経験などを通して、相手を深く理解することができ、相手を理解している意識が高くなるほど信頼という感情に繋がっていくことがうかがえるタイプであった。

「③共感」(11.0%)は「互いが分かり合えることができる」「一緒に分かり合える」等、親密な友人との内面的コミュニケーションにより相互理解活動ができるので、相手の状況に感情移入したり

賛同できたりすることがうかがえるタイプであった。

「④居心地」(10.3%)は「一緒にいて居心地が良い」「無言でいられる」「気楽な存在」等、親密でない友人との空間では相手の視線や言動に敏感になり過ごしにくい一方、親密な友人との空間では相手を気にせず過ごすことができ、互いを理解しているので会話以外でのコミュニケーションをとることができることを特徴とするものと考えら

れた。

「⑤時間」(8.0%)は「一緒にいる時間が長い」「長い時間たっても関係がきれない」等、共に過ごす／過ごした時間が長いほど相手を深く理解する機会があり、親密な関係が成り立つ経験によるタイプと考えられる。また、親密な関係の友人ほどさらに深いコミュニケーションや継続的關係の形成を求め、共に過ごす時間が増えるという相乗効果は生じやすいであろう。

「特になし」「違いはない」等からなる「⑥特になし」(5.8%)から、友人の中に「親友」という言葉の概念や差がなく、「友人はあくまでも友人」と捉えられる傾向もあることが示唆された。

「⑦特別」(3.9%)には「家族のようなもの」「大切な存在」「特別な存在」等がみられ、親密な友人の存在が、気を抜いて素の自分でいられる関係の場として支えになっているからこそ、親密でない友人との状況に応じた対応ができるという特徴をもつものと考えられた。

「⑧感覚」(1.0%)は「何かが違う」「言葉では表せない」「価値観の違い」等、共に過ごす中で親密な関係とは感じているが、何を基準にしているのか自分でもはっきりと把握・言語化はできていないものの、「ウマが合う」と実感されているタイプであると推測された。

以上の結果から、現代の青年が持つと考えられる「親友」観を総括すると、親友とは言動に敏感になり過ぎなくてもよい相手であり、その相手との関係では自分の感情に素直に行動でき、内面的理解を図る行動を通して相手のことを深く理解しているという確信があり、自分のことも理解してもらいたいという思いから共に行動する時間が多く、相互理解活動が積極的に行われる相手、ということになるのであろうか。

他方、「親友」という定義が自分の中にない、友人に差はないという「親友」観は、「誰とでも平等に付き合うこと」を是としてある程度の距離感を保った上での親密さを望む傾向であると推測されると同時に、関係性の濃淡への感覚が不明瞭であるという、友人関係に対する意識の希薄さや未成熟を逆照射する可能性がある観点ではないか、とも考えられた。

Ⅳ. 総合考察

本研究では、青年の友人関係にまつわる状況に応じた切替と信頼感のあり方を明らかにするとともに、「親友」と「友人」の捉え方や関わりの違いについて、高校生・大学生へのアンケート調査を通して検討してきた。

切替尺度、信頼感尺度、親友・友人関係尺度から青年の友人関係について分析した結果、自他を信頼できない人は人間関係に警戒心を抱いているため、自らを防御しようとして自己表明を控え、相手の顔色を伺いながらの浅い関係でいようとする傾向がみられた。また、自他を信頼している人は互いに理解したい／してもらいたいと考え、積極的に内面的内容の会話をするのがわかった。そして、相手の求める言動をとることで友人関係を保とうとする傾向は、自分の言動に自信がなく、相手にどのように思われるのか気になるため、相手が求めない限り自分を抑え表面的内容の会話で保とうとする姿勢との関連がみられた。さらに、友人とする基準を相性に置くほど、相手に気をつかい互いの内面を理解しようとしなくなる可能性が読み取れた。

「親友」と「友人」の捉え方や関わりの違いについて性差、年代差で検討した結果、親密な友人との関係では、男子は相手に自分を出そうとせず、適度な距離を保とうとする慎重な行動をする一方、女子は自分がどのように思われているのか気になりながらも内面を理解して信頼関係を深めていこうとする傾向がみられた。また、親密でない友人との関係では、男子は相手の意志に合わせることなく自分の言動に自信を持ち行動する一方、女子は関係が壊れるのを避けるため適度な距離を保ち慎重に行動することがわかった。そして、高校生では他者との信頼関係が相対的に浅く、自分が相手からどのように思われているのか気になり、相手の気分を害さないように気をつかう傾向がみられる一方、大学生では今まで築いてきた友人との信頼関係を深めていこうとする傾向が強くなるほど内面の理解活動が増加していくことが読み取れた。さらに、大学生では交友関係の広がりにより自己理解ができるようになり、自己に合わせた友人選択をするようになっていく傾向

がみられた。

「親友」と「友人」の捉え方や関わりの違いについては、全体的な傾向として、親密な友人関係になるほど互いを理解したい／してもらいたいという考えが強まることで会話が表面的内容から内面的内容になるという傾向が読み取れた。また、内面的な相互理解活動を通し、信頼感も高まり自分の正直な言動を貫くことができること、さほど親密でない友人とは適度な距離を保つことで関係が壊れるのを避ける傾向があることが考えられた。さらに、「親友」という定義が自分の中にない場合や友人に差はないという考え方から、現代青年の友人関係に対する意識の希薄さや未熟さという一側面が推測された。

友人への信頼や安定感が自己開示に影響しており、友人に対する自己開示は青年期において大きな役割を果たす(岡田, 2006)ことが、今回の研究での「親友」と「友人」の捉え方などの結果からも読み取れた。今後は、今回で明らかにできなかった①「親友」と認知している友人の数の推移について、②親友・友人関係尺度と「親友」と「友人」の違いの類型化との関連、③「親友」と「友人」の違いの類型化及び「親友」と認知している友人の数との関連、④「親友」と「友人」の違いの類型化での「特になし」という回答にみられる友人観や対人関係の特徴の精査、⑤性差・年齢差による親友観の違いについての検討などが今後の課題となるであろう。

<参考・引用文献>

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達: 家族および友人からのサポート感の影響 教育心理学研究, 45, 79-86.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替: 心理的ストレス反応との関連にも注目して 教育心理学研究, 55, 480-490.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友

人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.

- 岡田努 (2006). 自己開示 白井利明 (編) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房 pp. 88-89.
- 種村文孝・佐藤有耕 (2007). 青年期を中心に年齢段階別に検討した親友の有無と人数 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 650.
- 谷冬彦 (2006). 青年期の自我と自己 白井利明 (編) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房 pp. 58-59.
- 富田充保 (1996). 子ども・青年の人間関係の特質といじめにおける仲間関係—近年の「いじめ問題」を中心に— 教育科学研究, 15, 1-16.

付記

本論文は、平成21年度大学評価・学位授与機構提出論文に加筆・修正を行ったものである。

本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただいた学生・生徒の皆さん及び教職員の皆さまに、厚く御礼申し上げます。